

Title	白井先生と私
Sub Title	
Author	浅利, 慶太(Asari, Keita)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.369- 371
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0369

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ったことか。

しかし、私がフランス文学科在学中に帰国されて、つたない卒業論文を読んでいただけたのは、望外の欲びであつた。

卒論もそうだし、先生と私との因縁はもろもろの点で浅からぬものがある。昭和四十五年から九十年間、三田で「映画演劇論」の講座を受け持たせていただいたのも、先生の御推挙あつてのことである。

ところで、先ほどからこの小文を書きすすめながら、リチャード・アベドンがサントリーの広告のために撮影した先生のポर्टレートが、頭にちらつて仕方がない。さすがが世界一流の肖像写真家アベドンの撮つたものだけに、新聞紙上を飾つたあのポर्टレートは、先生の飄々たる人柄をあますところなく捉えている。

あの写真の先生は小脇に二、三冊原書を抱えておられるので、これから教室に向われるところのように見えるが、私には講義から解放されて、いざ酒場への図のように思えてならない。なにせ、先生とお会いするのは、庄

倒的に酒場が多いものだから。

先生、近々またどこかの酒場でお会いしましょう。

(音楽評論家・昭和三十一年仏文科卒)

白井先生と私

浅 利 慶 太

「(あなたにとって)恩師は」と問われると、ためらわずに「加藤(道夫)先生と白井(浩司)先生」と答える。

もちろん、劇団四季の名付親である芥川(比呂志)さんの在学中、仏文の主任教授だった佐藤(朔)先生のお二人も、私にとって恩師Vである。

一口に恩師Vといっても、いろいろなタイプがあると、私は思う。

自己の才能を見つけ引き出して下さった、あるいは、人生の方向を指し示して下さった恩師Vは、私の場合加藤先生である。加藤先生は、私に演劇の何たるかを教えて下さり、若くして世を去られた。計報に接したと

き、ああ、「おれは見捨てられたんだ」と、ちょっと恨んでもみたが、加藤先生の無言の教えは、今も私の心に生きている。

白井先生は、加藤先生とはまるで正反対の極にいらっしやる八恩師Vである。四〇代後半の私を、

「お前、ちゃんとやっているかい」

と心配そうに見守って下さる八恩師Vである。人間とは、美しく激しくそしていかに間の抜けた生き物であるかを、身をもって教えて下さった。いや、この場合、

「教える」という言葉を使うのは正しくない。おつき合以下さる中で、みずから実証された。という言い方のほうがむしろ真実に近い。人間の持つすばらしさと愚かさ、優しさと哀しき、すべてをいっしょくたにしたような、あたたかい包容力で私たちに接して下さった八恩師Vなのである。私だけがそう感じるのではない。劇団四季の盟友・日下(武史)君もそう感じている。先生の励ましを背に感じたからこそ、私たちは今日まで、好きな芝居の道を歩き続けて来ることができたのだ、と思う。

東京に「大学」はたくさんある。「学部」はその数倍。

「学科」に至ってはその数十倍だ。中で慶応の仏文はみことなほどの一族意識を持っている。そこに学んだ者たちは、佐藤先生を頂点として、目に見えぬ縦糸、横糸に結ばれているが、その中心に存在するのが白井先生である。先生ほど、全仏文の学生、卒業生に、おのれをさらけ出して見せる方を私は知らない。

若い学生は、時に無軌道ぶりを発揮する。そのたびに、先生はその尻ぬぐいに奔走される。そして、叱るのではなく、親身になってアドバイスをなさる。先生に迷惑をかけなかった学生が、仏文の中に果してどれだけ居るだろうか。実はこの私も先生をいちばん困らせた者のひとりなのだが。

先生をめぐってのエピソードには事欠かない。私の場合にかぎって挙げてみる。無責任な奴だったのだな、と誇られるのを承知の上で。

まず、どれだけお金を借りたのだろうか。三〇年も昔のことだが、入りたての一学生が、仏文科の(事実上の

主任教授)を訪ねて、「先生、お金を貸して下さい」と、臆面もなく言える。そんな雰囲気は先生には確かにあった。

お酒が飲みたくなると、「(先生は)サルトル(の翻訳)で稼いでいるんだから」と勝手な理屈をつけてお誘いする。私たち学生だけがわあわあ騒いで、勘定はいつも先生持ちだった。

学生運動に熱中して、ろくに勉強もしなかった私を、仏文に推薦して下さったのは先生だった。その不肖の弟子が、或る日、「先生、相談に乗って下さい」とお願いした。「午後の授業があるんだけど君は？」と先生。「つまらない講義だからサボります」と私。渋谷の喫茶店「リルケ」で待っていた私の耳に、「おい、君の授業だったぞ。しかたがないから出席にしておいた」。先生はニヤッとされた。

劇団四季を創るとき、目下君と私は、いの一に先生に相談した。たとえアマチュア劇団といえども、結成にトラブルはつきもの。結成後一〇年間ぐらい、その処理

をすべて先生に押しつけ、人間関係の調整、紹介をお願いして、劇団はやっと軌道にのった。先生は今でも私を見るとうおっしゃる。「目下君はだいじょうぶかね」。

結局、劇団四季がこの三〇年間、最もお世話になったのは白井先生、ということに落ち着く。「白井先生には、小学校から大学まで教わったんだ。だから先生は私(たち)のことを心配して下さいさるのだ」と、私は結論づけた。現実には決してそうではないのに。

繰り返すことにする。

“神話”の中に住まわれる加藤先生が、私にとって、かけがえのない恩師であることはまちがいない。

そして、私(たち)が、熱い想いを込めて「恩師」と言い切ることのできるのが、白井先生である。

(演出家・劇団四季主宰者・仏文科中退・特選塾員)